



Title	モンテーニュ研究の歴史：ヴィレーおよびボルドー市版以後；モンテーニュ研究の問題と視点
Author(s)	広島, 敏史
Citation	Gallia. 1971, 10-11, p. 262-281
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/7070">https://hdl.handle.net/11094/7070</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## モンテーニュ 研究の歴史<sup>1)</sup>

——ヴィレーおよびボルドー市版以後；  
モンテーニュ研究の問題と視点——

広 島 敏 史

### ヴィレーおよびボルドー市版以後

1906年、当時ボルドー大学助教授であったストロウスキーは、ボルドー市立古文書館刊行委員会の後援のもとに、「ボルドー本 l'Exemplaire de Bordeaux」を忠実に翻刻した「モンテーニュのエッセー第1巻<sup>2)</sup>」を刊行した。続いて、フランスアカデミーによってサントゥール賞を与えられた第2巻が1909年、ジェブランとの共編になる第3巻が1919年、カーン大学教授ピエール・ヴィレーによる『エッセーの源泉』と題する第4巻が1920年、グレース・ノートン嬢の協力によるヴィレーの『エッセー用語辞典』の第5巻が1933年刊行されて、27年のながきにわたる、モンテーニュ研究史上画期的な大事業は完結し、以後『エッセー』の諸版は全てこの「ボルドー市版 l'Edition municipale」を底本とすることとなった。

ボルドー市版刊行の必要性和その重要性については、当該版のストロウスキーの「序論」、および「第1巻付録Ⅲ1595年版の異同」の冒頭の部分<sup>3)</sup>、ヴィレーの『モンテーニュのエッセーの源泉と進化』の「序文」<sup>4)</sup>、アルマンゴー編『モンテーニュ全集』の編者の「緒言」<sup>5)</sup>などに詳しく述べられているが、要するに、第1には、モンテーニュの死後グールネー嬢によって刊行された、最後の増補版、そして以後19世紀末迄のほとんど全ての版本の底本となった、いわ

ゆる「グールネー版」が、モンテーニュ自身書き入れを施した原本すなわちボルドー本とかなりの点で相違があり、不正確なものであることが判明したからである。第2には、多数の句読点からはじまり、語、語句、長短とりまぜた文などの、修正、加筆挿入は、1588年エッセー全3巻の刊行直後から1592年死の時迄モンテーニュによって続けられ、この書き入れを行なった原本の題扉の「最初の2巻への加筆と第3巻を増補された第5版」という文字を、モンテーニュ自身が抹消して明瞭に「第6版」と書きなおしている点<sup>6)</sup>などからみて、この最後の大増補版（全3巻に対して約 $\frac{1}{3}$ 位の増補）の刊行はモンテーニュ自身の遺志であったし、そうだとすれば、何よりもモンテーニュの正しい人間像を伝えるために、この原本すなわち「ボルドー本」の正確な翻刻は不可欠だったからである。第3には、1)19世紀末迄の読者、研究者がエッセーを一つの全体としてだけながめてきたのに対して、エッセーの成立の経過、すなわちモンテーニュの思想の進展の過程を、分析的に、実証的に研究し、2)またあわせて、多量の加筆によって読解困難になったエッセーの原文についての読者の理解を容易にするためには、最少限1580年版のテキスト、1588年版の加筆とテキスト、そして死にいたる迄の加筆の区別を明らかにすることが必要であったからである。そしてこの第3点の第1項に関しては、当然1582年1587年版などの「異同 *variantes*」が加えられねばならなかったし、エッセーの綿密な校訂版の出現は絶対不可欠の必要条件であったし、事実この決定版を生み出す直接の動機はこの研究上の要請であった<sup>7)</sup>。しかし第2項に関しては、この決定版以後ほとんど全ての版本が上記3種のテキストを弁別する記号を原文に付したのに対して、そのような人為的技巧的記号の付記によるテキストの弁別は、エッセーの読書をとっつきにくくし、錯雑したものにしてしまうから、便宜よりは不都合の方が多いとして、記号の付記をあえて行なわない校訂者もある<sup>8)</sup>。そしてまさにこの校訂者の意図は、モンテーニュ自身の意志と合致するといわねばならないのかもしれない。なぜならば、第1に、その手沢本に綴字や句読点にいたる迄詳細に、しかも印刷に付することを念頭において明瞭に手を入れたモンテーニュに、テキストの諸版の弁別をさせる意図があったならば、それを指示しなかったとは考えられないし、第2に、時代的にはさかのぼるが、すで

に1588年版で最初の2巻に加えられた約600の加筆について、それを行なったであろうし、第3に、おそらくモンテーニュは、過去の全量—それがよしんば矛盾するものであろうとも—を含んだ実存として読者の前に常に現在することこそ望んだろうと考えられるからである。そしてまた19世紀末迄の読者は、モンテーニュをそのように包括的に一たとえ思想の変化を読みとった場合でも<sup>9)</sup>—読み、理解してきたのも事実だからである<sup>10)</sup>。従って、この記号の問題は単にそれをつけるかつけないかということではなく、エッセー全体を分析的にとらえるか、総括的にとらえるかという、後にふれる、根本的な視点の問題とかわりあいがあるといえる。

ここで自ずからもう一つの問題が提起されてくる。つまり19世紀末迄の読者は、それ程「ボルドー本」と相違があり、不正確な、「変質せられた *altéré*」グールネー版を底本とした諸版でエッセーを読んだのであるから、そこから導き出された彼らのモンテーニュ像は、はたして実像といえるのか、実像でないとしたら虚像なのかという問題である。この問題の正確な解決のためには、問題となる人物の読んだ版本を推定し、それとボルドー本との異同を確定し、その人物の構成したモンテーニュ像の要素として、モンテーニュ自身に属さないもの、すなわち、グールネー版で写字生や編者のさまざまな不注意や誤ちや、意図はどうあるにせよ原文の意味をゆがめてしまった変改と書き加えによって変質させられた語句なり文を、どの程度論拠として用いたかを精査すべきである。しかし、この小論の目的はそこにはないし、例えばこの小論の前編で取扱われたパスカル、マルブランシュ、サント・ブヴの場合も<sup>11)</sup>、その個人作家研究 *monographie* を目指したものではなく、各人の総括的なモンテーニュ像を相互に比較することにあつたのであるから、さし当って、グールネー版とボルドー本との異同の程度と、そのもたらす影響の度合を少し検証しておきたいと思う。

われわれは現在、1924年から1945年にかけてアルマンゴーによって刊行された『ミシェル・ドゥ・モンテーニュ全集、全12巻』<sup>12)</sup>のうち第1巻から第6巻をなすエッセーの各頁の脚注に、1595年版のヴァリエントとして、詳細にその異同をみることができる。そしてその異同の種類を問わないとすると、全3巻を通じての総数はおおよそ2000近くにもものぼると思われる。特に第1巻と第

3巻は各頁毎に見られるとあってよい位で、少なくとも各巻にそれぞれおおよそ700から800位はあると思われ、それに比べて、第2巻は比較的少ない。所でこれら多数の異同はすでにストロウスキーによって精密な検証が行なわれており、その結果が「ボルドー市版第1巻序論」の18頁から21頁にかけてと「付録Ⅲ」461頁から464頁にかけて述べられている<sup>13)</sup>。これによると、多数の異同の大部分は、写字生と編者の不注意や誤解による、綴字、句読点、語、語句の、欠落、位置の間違い、読み違い、および文意を明らかにしようという意図のもとに行なわれたと考えられる変改、そしてさらに、なんらかの原因で原稿が失われたと考えられるものも含めた書き加えであって、「ボルドー市版」では、結果的には、これらのうち、重要と思われる変改と加筆を、第1巻で約10、第2巻で約4、第3巻では0を、本文中の脚注とし、比較的に重要性の劣るものを、巻末付録として、第1巻約45、第2巻約55、第3巻約210余をあげているにすぎない。そこで脚注部分を主として、比較的重要と思われるものをコンテキストに沿って考えてみた結果、部分的には問題があっても、モンテーニュの思想の根本的性格に、大きな影響を与えるとは考えられないし、さらにまたこの事は、エッセーが、たとえばデカルトの『方法序説』のように一語一語を、それも語の概念を考え、精緻な体系的論理構築の一つ一つの要素として積みあげてゆき、個と全体が緊密な論理構成によって成立させられる性質の書物とは、全く異った性質の書物であることが関係してくるものと考えられる。つまりモンテーニュの論証の方法と構成の問題がかかわりあいをもってくるのであるが、結論的に云えば、モンテーニュの根本的思想を論じうると想定して、エッセーの中からその論拠をえらびだす場合、たとえモンテーニュ自身の手になる原本を用いても、その想定される全体とのかかわりあいを、よほど慎重に、そしていわゆる普通一般の論理形式に従ってではなく、いわば複合的、有機的、生命的に、そして直観的にとらえるのでなければ、モンテーニュの実像を見誤る危険は常に存在しているということなのだと考えられる。従って、モンテーニュを、マルブランシュが「想像力に富む、魅力的な文人」と考え、パスカルが「懷疑主義的哲学者」として、サント・ブヴが「完全な人間的自然」として考えたとしても、それは、各主体とモンテーニュとのかかわりあい、そし

てモンテーニュにアプローチする視点の相違からきているのであり、各人がめぐりだしたモンテーニュ像は、それが完全な誤りのない全体像ではないとしても、それぞれの意味での実像でありうるのもであって、決して1595年版の異同から生じた虚像であるとは考えられないのである。

以上述べてきた「ボルドー市版」の刊行以後、モンテーニュの本格的研究がさまざまな研究者によって現在まで多数行なわれてきたことはいうまでもない。1959年刊行のアレクサンドル・シオラネスコの『16世紀フランス文学書誌<sup>14)</sup>』は、モンテーニュに関して、642の研究論文ないしは著書をあげているが、そのうち229が1906年以前、413が1906年以後1959年迄となっていて、その比率は3世紀間(17, 18, 19世紀)に1に対して、20世紀前半だけで2の割合になっている。もちろん、ボルドー市版第1巻刊行の1906年を境にして区切ることは、はなはだ機械的にすぎるし、ましてやこの場合、研究テーマの分類は無視してのことであるから、あくまでも一つの目安としての数字ではあるが、ここでもまた「ボルドー市版」刊行の意義の重要性をみることができる。所で、この網羅的で、研究テーマの分野別に分類した以外何の批評も価値判断も伴っていない「書誌」に対して、1956年にアレグザンダー・シュッツによって刊行された『フランス文学の批評的書誌、第2巻、16世紀』は、この本の「序論」<sup>15)</sup>にも述べられているように、《二重に批評的 doubly critical》である。つまり第1には、いかなる時期の研究であれ、現在でも重要で価値ありと判断された研究だけを選択して記載したという点で、第2には、記載された各研究には必ず簡潔で端的な批評が、すなわちその項目を扱った編者の価値判断が明示されているという点で、この二つの書誌は何れもほぼ同じ時期迄の研究を対象としているのであるが、前者で614の数字が、後者の批評的精神の前では304、すなわち1/2以下にへっている。そしてそのうち40が1906年以前であり、264がそれ以後となっている。なお後者は1966年再版されているが、1959年以後の研究は含んでいないようである。なおこの両書誌発刊以後5年後の1965年からは、「ユマニズムとルネッサンス関係国際書誌」<sup>16)</sup>によって網羅的に知ることができるが、1965年に28、1966年に33というように、年々でるモンテーニュ研究の数は決して少なくない。また上記シュッツの「批評的書誌」以後については、

「*Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*」各巻末の、多数の詳細な研究書書評ののせられた「報告 *Comptes rendus*」<sup>17)</sup>を参照した。それに、関根秀雄著『モンテーニュ伝』（白水社刊行）中の諸家の見解の紹介と批判も参照した。

さてここで、この小論の目的、つまり重要なモンテーニュ像のモンタージュを行なうために<sup>18)</sup>、上記の各書誌や、さまざまな、エッセーの版本・研究書それに文学史などの、書誌を補助手段として、多数の研究のなかから、第1に、それが個人作家研究であってもなくても、とにかくモンテーニュの思想を総括的な形で問題にしており、第2には、今現在われわれが問題にしている、モンテーニュの全的な実像を探求する主要な流れのなかで重要な拠点を占めていると思われる研究だけを、取捨選択しなければならなかったことを、ことわっておきたい。また今一つ、わずか10冊に満たない研究書を取りあげるとはいえ、例えば、チボーデの多量の断片的遺稿、彼自身の言葉に従えば《モンテーニュにあてて書いた手紙 *des lettres à Montaigne*》、われわれからみれば、長年月にわたる、2人の文学史上の偉人の貴重な対話、を整理編集した『モンテーニュ』<sup>6)</sup>一冊だけを考えても、これをまともにとりあげれば、「チボーデのモンテーニュ論」とでも名付けられる、ゆうに一冊の著書が必要であることは明らかであって、わずかな紙数と限られた目的のもとに、何としても過去60年余の研究の歴史を、そしてそれも何れ劣らぬ大著、名著をたどらねばならないとすれば、自ずからわれわれは、これらの研究書を取扱う観点を、ここで定めておかなければならなくなることを、ことわっておきたい。

そこで、以下ほぼ時代順にとりあげられる研究書を、主としてモンテーニュの思想の「概要の三部作説 *la triologie des manuels*」<sup>20)</sup>すなわちモンテーニュの方法の問題に焦点をあわせてとりあつかうことになる。

1906年ストロウスキーの『モンテーニュ』<sup>21)</sup>が、そして1908年ヴィレーの『モンテーニュのエッセーの源泉と進化』がそれぞれ発表された。モンテーニュ研究史上忘れることのできないこの2人の碩学は、最初お互いが同じ問題、「モンテーニュの思想の進化」というテーマを研究していることを知らなかったが、「偶然の機会にそのそれぞれ独立して行なわれた探求の結果を比較する

ことになり、エッセーの歴史（＝エッセーの執筆年代）の根本的ないくつかの日付についての一致に満足した<sup>21)</sup>」ことは、それぞれの「序文」<sup>22)</sup>に述べられている。そしてこの2つの研究の共通点としては、第1に、モンテーニュの読書と、エッセーに用いられた源泉・典拠の年代の確定ないしは推定、第2に、その結果からでてくるエッセーの執筆年代の確定ないしは推定、つまり研究方法の一致と、第3に、エッセーの思想の変遷をたどり、モンテーニュの最終到達点を確認すること、つまり研究テーマの一致の他に、第4に、その思想の変遷を、ストア主義的時代—懷疑主義的時代—自然主義的時代の3期と、さらに死にいたる迄の加筆の時代にわけてたどり、モンテーニュの理想的人間像を「自由人 *homme libre*」または「オネット・オム *honnête homme*」におくということ、つまり研究内容の大筋の結論、その大綱における一致、そして最後に、このような実証主義的方法でモンテーニュの思想の変遷を扱った研究としては、モンテーニュ研究史上最初のものであり、そういう意味でも、またその内容においても、研究史上重要な位置を占め、ながく影響を及ぼしている点などがあげられる。

しかし以上の共通点は、いわば平板にみた太い骨組の問題なのであって、その骨組の構成の仕方や、肉付け、全体像の仕上げはそれぞれ異なっており、従って完成した2人のモンテーニュ像が、それぞれの個性にいろどられて、違ったさまざまなニュアンスを発散し、それぞれ異なった全体的印象をわれわれに与えるとしても不思議はない。それはストロウスキー自身が、いみじくもその著書の冒頭で述べていることであり<sup>23)</sup>、それはまた文芸学確立にいたりえない文学研究の宿命、いやむしろそれこそが—研究されるものと研究するものの個性的な主体のこすりあわせから生ずる文学的生命的真実こそが、文学研究の生命なのではないだろうか。

さて、上記の共通項から、重点的にその相違点を拾うと、第1に、エッセーのクロノロジー確立の方法とその実際に関しては、文献学的実証主義の巨匠ランソンの弟子であるヴィレーは<sup>24)</sup>、模範的なその方法の適用の過程と成果を、その著書の約半分をついやして示した。そしてヴィレーの著書は、エッセーの思想の進化、つまり建物の上部構造よりは、それを支える下部構造の、きわめ



て精度の高い実証性と有効性によって、現在でも基本的不可欠の研究書とされているといつてよい。そして、この実例は、いわゆる文献学的実証主義—証明された事実の積重ねによって外から、作品の、または作家の内なる中心へ迫ろうとする研究方法の、有効性の最大限と、そしてその限界を示しているように思われる。第2に、思想内容の変遷に関して、ヴィレーは、当然の事ながら、自ら実証したモンテーニュの読書のクロノロジーと読書による時代思潮の影響を重視したし、エッセーのクロノロジーもそれにつれて絶対的な意味を持ってくるから、ヴィレーの設定したモンテーニュの思想の「進化 l'évolution」は次のようになった。セネカの影響のもとに、ストア哲学のうち形而上学をすて、道徳のみ、それも混りものの多い道徳をとりあげ、理性と意志への強い信頼と、それによる自然（＝本性）の克服を信じたストア主義的時代。すなわち時代思潮や親友ラ・ボエシの影響でストア主義熱にうかされるが、この人間性を超克する道徳哲学を実践することなく、現実的実践的道徳の提示者プルタルコスの影響と彼の気質から生れたストア哲学に対する疑いと批判は、理性と全学説の否定、つまり懐疑主義へと彼を向わせることになる<sup>25)</sup>。これがセクストウス・エンピリクスの読書を契機とした「ピロニスムの危機 *crise pyrrhonienne*」の時代、全ゆる事柄についての「相対主義 *relativisme*」の時代である。理性と真理への到達の可能性は否定され、習慣が全てを支配することになる。しかしただ一つヴィレーが観察した肯定的要素は、知識の相対性の認識の結果、モンテーニュは自己の判断にのみ信をおくようになるということである<sup>26)</sup>。また信仰については、宗教的感情はないが、いわゆる日常生活におけるカトリック教徒とされる<sup>27)</sup>。第三期は、「自然哲学 *la philosophie de la nature*」の時代と名付けられ、実践的「合理主義 *rationalisme*」（なぜなら理性も自然だから）による、公私両面において「よく生きる *bien vivre*」ための道徳が打ち出されるが、公的生活に関しては、個人主義をその主要な欠点とする道徳、すなわち「保守主義 *conservatisme*」にとどまるとされる<sup>28)</sup>。最後に、死にいたる迄の加筆は、ストア主義の否定が強くでている点を除いて、大した重要性はなく、初期の「衒学趣味 *pédantisme*」への逆戻りだと断定される<sup>29)</sup>。要するに、モンテーニュの描いた最終的、総括的、理想的人間像、すなわち彼自身

が常にそうであり、そうであり続けようと努力した人間像は「オネット・オム」であるとされる<sup>30)</sup>。

これに対してストロウスキーは、ヴィレーの論理的明析的直線的学者的文体とは逆に、柔軟で繊細で流麗でしかも説話的な文体で、モンテーニュの人間性を考え、内心の要求をくみ、複雑きわまるモンテーニュ像のひだの一つ一つを逃すまいとするような柔軟さと慎重さで論議を展開している。モンテーニュが、先ず、急激な発作によって、すなわち一般の流行に感染してストア主義者になった、というよりはストア的になったとする点では、ヴィレーとかわらないが、ストア主義がモンテーニュに、人間の魂の力と努力の感情を植えつけたこと、さらには、すでにここでモンテーニュが生来いだいていた「宇宙 l'univers」における被造物の多様性とその平等性の感情が、ストア哲学によって完成させられたことが指摘されている<sup>31)</sup>。むしろストロウスキーの論旨の展開の妙味は特にストア主義時代以後にある。先ず一種のユマニスム humanisme (=ピロニスム pyrrhonisme) によって、過度のユマニスム (=ストア主義) から解放されるという点で、ヴィレーと微妙なくいちがいを見せ、さらに、モンテーニュの懐疑主義 scepticisme に、一応「危機 crise」をみとめはするものの<sup>32)</sup>、ヴィレーが見た「知識—認識 connaissance」の否定—従って「存在 être」にいたる道の断絶よりは、むしろ万物流転のうちにある「生成 devenir」(一種のヘラクリティスム héraclitéisme—ただし「存在」を否認しない<sup>33)</sup>)と「存在」を、生成から存在へではなく、存在の生成に対する「啓示 révélation」によってつなぐことにより<sup>34)</sup>—しかしストロウスキー自身この一種のジャンセニスムが非常に晦渋で、哲学的には、はなはだ解釈困難なものであることを認めてはいるが<sup>35)</sup>—モンテーニュの懐疑主義を、人間もその一部にすぎないこの宇宙のなかで、現実のどんな微妙な変化にも応じて、時々刻々に新たに、常に生きんとして、一瞬も止まることなく、何物にもとらわれない「自由思想 libre-pensée」(ただし普通一般にいわれる意味ではなく)であり<sup>36)</sup>、信ぜんがための懐疑という意味で宗教の一形式であるとし、結局モンテーニュは、福音書の弟子であるよりも聖書の弟子であり、聖パウロよりもモーゼの後裔であるとして<sup>37)</sup>、ヴィレーよりも、はるかに積極的な意義を、モンテーニュの懐疑主義に

見出している<sup>38)</sup>。第3期では、ヴィレーも認めている、モンテーニュの「自我 moi」の探究を通じての「他我 soi」の発見一個別的自然の認識から普遍的自然的認識への発展をふまえながら、万物流転の宇宙、変化と多様性を本質とする世界のなかで、その流動する生の流れに従い、日常生活では広義の習慣に従いながらも、「良識 bon sens」による人生の諸要素の「融和 l'équilibre」を目的とする中庸主義によって自由を求めつつ、人間社会に行動する、「不自然にされていない全ての人間にきざみこまれている普遍的理性の種子」から生い立った「賢者 sage」の真のユマニズムが解明されている<sup>39)</sup>。しかし、「世界の普遍的公安秩序 la générale police du monde」と「諸国家の公安秩序 la police des Etats」の両方に従うことによっておこる矛盾の解決の困難さもここでは指摘されている<sup>40)</sup>。そしてこの後、つまり思索と行動に関するエッセー（＝判断の試し）の後、「混乱 désordre」をもたらし、自己にも読者にも皮肉とユーモアをなげかけはするが、しかし全ゆる拘束から自己をとき放とうとする「ディレッタントィスム dilettantisme」の時代が最後にくる<sup>41)</sup>。そして、自由を求める賢者の条件は、第1に、「強固な意志 une volonté vigoureuse」（＝ストア哲学の教訓）、第2に、生成と存在の対立のなかで道德の支えとなるべき「宗教的魂 une âme religieuse」（＝懐疑主義の教訓）、第3に、「鋭く、解き放たれた精神 un esprit vif et qui soit détaché de son contenu」（＝ディレッタントィスムの教訓）、最後に、「人間的で柔和な心 un cœur humain et doux」を、あわせそなえもって生きることであり、結局「自由人 homme libre」がその理想とされる<sup>42)</sup>。

以上二つのすぐれた研究の比較、そのモンテーニュ像の比較検討から結論できることは次のようなことだと思われる。この二人の研究者が、モンテーニュの思想の変遷を取扱う方法には、最初にみた形式的な一致とは異なり、一つの重要な相違が見出される。そしてその相違は、それぞれの著書の最後の結論に明瞭に示されている<sup>43)</sup>。つまり、ヴィレーの方法は、きわめて分析的であり、思想の変遷を、それに密着して、実証的直線的にたどったから、結果として、ストア主義時代というものは、自然哲学時代での合理主義への復帰ということを除いては、モンテーニュの経験した第一の危機として、全面的に否定された

ままになり、また懷疑主義は文字通り形而上学、科学、知識、認識、理性、感覚などの全てを否定して、日常生活の規範としても、宗教としても、習慣しか残さない第二の危機と考えられたから、何か荒漠たる風景だけを残すような否定的印象を与え、辛うじて、伝統（＝習慣）の尊重が自然哲学時代に生残り、一種の前言取消しとして「古代の合理的道德 la morale rationnelle de l'antiquité」と「実証主義 positivisme」への復帰がでてくることになる。従って、ヴィレーは、この延長線上にデカルトと特にベーコンを見ることになる。所がストロウスキーは、各時期の推移を積層的に、そしてできるだけ肯定的積極的にとらえ、それらを全て最終の結論—人間像に結集している（もちろん、ストロウスキー自身も言っているように、いくつかの解釈の困難さを伴ってではあるけれど）。それにもう一つ、すでに懷疑主義の解釈の所で、明らかにされているように、エッセーそれ自体が「持続 *durée*」を含んでいるという考え方はきわめて重要で、暗示的である。だから、ここで、この二つのモンテーニュ像の比較に最後の結論を出すとすれば、分析の際に明らかに「総合 *synthèse*」を意識していたストロウスキーの方がより全体的実像に近いのではないかといわざるをえないし、また事実、この後の研究も、ヴィレーの実証的成果をふまえながらも、方向としては、ストロウスキーの延長線上にあると考えられるのである。

1933年プラッターが、この時期迄の諸研究を集大成する形で『モンテーニュとその時代<sup>44)</sup>』を刊行する。この著書で注目すべき点は、先ずモンテーニュが「唯信論者 *fidéiste*」であるということの認知（ヴィレーの異議申立てにもかかわらず）であり<sup>45)</sup>、さらに、これまたヴィレーの見解の否定であるが、モンテーニュの精神は「繊細の精神 *l'esprit de finesse*」であって「幾何学的精神 *l'esprit de géométrie*」ではないとして、エッセーのなかに（特に3巻13章に）、デカルトの方法やベーコンの経験的実証主義の出発点をみることを否定していることである<sup>46)</sup>。最後に、モンテーニュの思想の第三期を「エピキュリスム *épicurisme*」であると規定していることなどである。

以上で、モンテーニュ研究の20世紀の前半戦が、名実ともに一応終わったという印象を強く受けざるをえない。特に、プラッターが1935年上記自著を要約

したような形で刊行した『モンテーニュ研究の現状<sup>47)</sup>』をみると一層その感を深くする。

博学博識それに明敏をもってなるサント・ブヴァが1848年「モンテーニュについては全てのことが言いつくされた<sup>48)</sup>」と述べてから後に、ヴィレー、ストロウスキー等の諸研究が行なわれたことはすでにみた通りである。この度も、われわれにとって、問題は解決されたわけではなかったようである。すなわちフーゴー・フリードリッヒは、「モンテーニュに関する深遠な、時として輝かしい註釈は、断片的である。それらは、彼の精神の一面かまたはいくつかの面しか取扱っておらず、総体を取扱ってはいない<sup>2)</sup>」と宣言して、その著『モンテーニュ<sup>49)</sup>』のドイツ語初版を1949年に、フランス語訳を1968年に公けにした。彼によれば、モンテーニュを、「認識論の理論家 *les théoriciens de la connaissance*」(例えばパスカル)や、「教育者 *les pédagogues*」に分類したり、「啓蒙哲学の先駆者 *un précurseur de la philosophie des Lumières*」(例えばヴィレー),「ルソー的自然哲学の先駆者 *un précurseur de l'idéologie rousseauiste de la nature*」(例えばセイエール<sup>50)</sup>),「一種の不完全なベルグソン *une sorte de Bergson avant la lettre*」(例えばストロウスキーやチボーデ)にしてしまうのは何れも不完全なとらえ方なのである<sup>51)</sup>。特に批判の対象になったのは、それ迄モンテーニュ研究の方法の基本とされた、「思想の3期進化説」で、この方法は、「非常に有機的な精神 *un esprit très organisé*」の諸相を不自然に孤立させ、この思想のクロノロジーをたどる方法ではとうてい「統一 *la cohérence*」はつかみえないとされる<sup>52)</sup>。それでは、フリードリッヒは、モンテーニュをどんな視点から、どんな方法で、とらえ、そしてその総括的な思想の中心をどこにおくのであろうか？彼がモンテーニュを全体的にとらえようとする視点は、この地上で日々生活している人間、すなわち行動し、判断し、また行動をというように、その死迄人生の営為を続ける人間像であり、その方法は、「3期進化説」を否定する以上、エッセーのクロノロジーを問題にすることなく、その思想を、全体が部分に、部分が全体に密接に、有機的に関連し、しかも、エッセーそれ自体がたえまなく変化する人生についての果しない探究である以上、多様性と可変性のうちに恒常性を、恒常性のうちに多

様性と可変性を含むような、動的な構造的把握でなければならないだろう。そして、その思想の中心、それはモンテーニュの最終目的でもあった筈だが、それは、いかなる既存の哲学や人文科学のわくにもはまらない、そして決して道徳規範をたてることのない、たえまない探求としての「実践人間学 Science morale」であらねばならない。

さて、セッセーの題材が終始一貫「人間」であることは、疑う余地のない事実である<sup>53)</sup>。そして、「モンテーニュの慧眼な懐疑主義 le scepticisme clair-voyant de Montaigne」と、その一つの帰結である、神秘神学の方へには向わない、否定的な「唯信論 fidéisme」は、神と自然の前での、この宇宙の中での人間の卑小さを明らかにし、人間を、何の権能ももたない低俗な存在にしてしまった。しかし、モンテーニュが探求の対象にしたのは、まさに、このように位置づけられた人間なのであって、それ以外のものではない<sup>54)</sup>。この事実はすでにストロウスキーも指摘している。他方、モンテーニュの懐疑主義は、「事実の真理性の発見 la découverte des faits」を導く。しかしフリードリヒはこの一種の経験的実証主義を、ヴィレーのように、科学の方へに導くことは認めない。本来モンテーニュは人間にしか関心をもたないし、デカルトやベーコンの科学技術による世界の支配には無縁であった<sup>55)</sup>。

次には、そのような人間を、あるがままに受容すること、すなわち16世紀の他のユマニスト達が行なった人間を抽象的原理的に論ずることをやめ、あくまでも具体的な、日々変化してやまない、従って本質的に矛盾を含んで、生きている人間として、具体的にとらえることが探求の方法となる<sup>56)</sup>。ここでわれわれは、モンテーニュがエッセーの序文で述べた、あの有名な「私の本の題材は私自身である」という言葉を、まさに思い出さざるをえない。つまりその人間とは、とりもなおさず「個性 l'individualité<sup>57)</sup>」と喜怒哀楽つまり情念<sup>58)</sup>をもった一人の人間、エッセーでは、モンテーニュ自身でなければならなかった。この自分でも予見できない「自我 moi」の具体的な「推移 passage」を、たえず観察し、分析すること、そしてその結果を一矛盾をも含めたままで一書きとどめ、描き続ける執拗さそのものが、「総合 synthèse」, それも果しなく繰返される総合なのである<sup>59)</sup>。ただし、この「実践人間学 Science morale」<sup>60)</sup>には、

当然の事ながら、原理も、体系も、従ってたてるべき規則—規範もない。人間も世界もそれ自体矛盾を含むし、人間はその何れについても確固とした予見性をもたないから<sup>63)</sup>。ただあるのは「心像 image」だけである<sup>64)</sup>。また、この自分独自の個性の観察を通してのみ（これが唯一の認識への到達なのであるが）、「人間性の本質の認識 la connaissance de la condition humaine」<sup>65)</sup>、つまり「自我 moi」から「他我 soi」への認識に到達しうる<sup>66)</sup>。

そしてこのような二律背反的構造の中で<sup>67)</sup>、「自我」が自律性を保つための「無智の智 l'ignorance doctorale」が、「世界の未知の秩序との感性的接触 contact sensible avec l'ordre inconnu du monde」を可能にし<sup>68)</sup> 世界と自我を調和させる行為の完遂こそが「知恵 sagesse」であり<sup>69)</sup>、エッセーの最後の巻末に述べられた「自己の存在の公正な享受」の喜びこそ、本来の、正統的な「精神的エピキュリスム épicurisme spiritualisé」<sup>70)</sup>である<sup>71)</sup>。

なお、上記の記述からもうかがわれるように、終始主導的役割を果している思想は、モンテーニュの懐疑主義であり、フリードリッヒは、ストア主義の存在を否定し、モンテーニュの同時代人が、彼にストア主義者をみたのは間違いであるとしていること<sup>72)</sup>をつけ加えておかねばならない。

以上の要約は、フリードリッヒのきわめてすぐれた、繊細で柔軟でありながら、しかも弾力性と強靱性にとんだモンテーニュ像の、多くのものを逃していることを、了として頂きたい。

1963年、前に述べたチボーデの断片的遺稿を編集した『モンテーニュ』が刊行された。ここでは、チボーデが、「事物の本質は個別的で多樣的であるばかりでなく、継続的な変化の道程にあって、たえず運動し、個定した規則をもたず、全ゆる理性的構築の試みの範囲をこえ、それを不可能にする常動論 mobilisme」<sup>73)</sup>の概念をモンテーニュ解釈に導入していること、さらに、「3期進化説」については、1) 讃美するに止まったストア主義、2) 実践されたエピキュリスム、3) 彼自身のものでない全ゆるものに対抗し、自由であるために採用はしたが、実践しなかったピロニスム（すなわち伝統・習慣だけを道德規範として生きるのではないということ）、そしてそれが抱懷されたのは1)—2)—3)の順であり<sup>74)</sup>、「この三つの態度が、唯一の思想の調和的活動を形成する」<sup>75)</sup>と

していることだけを指摘しておきたい。従って、ストア主義のもつ意味の解釈を別にすれば、少なくとも、モンテーニュの思想全体を、ダイナミックな構造のもとで、統一性と多様性・可変性を同時にはらんだ自我の生きるための方法の表現とみる基本線では、フリードリッヒと方向性を同じくしていると言えるものと考えられる。

最後に、「これこそ、統一を求めて決然として出発する研究である」<sup>76)</sup>と評された、ミカエル・バラの『モンテーニュによる存在と認識』<sup>77)</sup>が1968年発表される。ここでは終始モンテーニュの懐疑主義が「無智の智 Inscience」という形で、第一に存在と生成の対立、第二に認識の問題として、多様性と統一性の対立、第三に人格的段階として、自我と他我の対立などの解消の軸となって機能し、結局、エッセーに含まれる、理性と普通の論理では解決不可能な問題に対して、形而上学的、認識論的、美学的観点からの解決と統一をうちだしている。従って「3期進化説」はここでは全く問題にならない。また大筋で見事な論証であるが、はたして細部迄その統一性を保持できるかどうか、そして最終的には、モンテーニュをあまりにも形而上学的にとらえすぎてはいないかという印象が強い。

### モンテーニュ研究の問題と視点

われわれは、16世紀からはじめて、20世紀の現在迄10人の人々が描き出したモンテーニュ像を比較検討してきた。先ずいえることは、モンテーニュを把握する方法の点で、この10人は、はっきり3グループにわかれるということであるが、第1のグループは19世紀末迄の人々で、エッセーの歴史を問題にすることなく、それを総体的にとらえた。第2のグループは、20世紀前半の人々で、エッセーの歴史を重視し、主として三期進化説の方法で、分析的歴史的にとらえた。第3のグループの人々は、エッセーの歴史を知った上で、そこに統一を求めて、できる限り総合的にとらえようとした。われわれは一体どの道を選ぶべきであろうか？ 第1の道は問題にならない。第2グループのストロウスキーのように、分析的歴史的でありながら、なお総合的であろうとする方法は、なかなか捨て難い所があるが、すでにフリードリッヒや他の人々にはっきり破



産宣告をされているし<sup>78)</sup>、たしかに不自然で、ある種の無理と困難さを伴う事は事実である。そしてわれわれも、この宣告に同意するとすれば、従来多数のモンテーニュ紹介書がとってきた、伝記と併行して、その思想を歴史的に述べる方法も同時に実施をさけた方がよいことになる。とにかくわれわれとしては、第3の道をとるより他ないようである。それでは、その道をとる場合の問題点は何であろうか？ 先ず最初に、ドレスデンのように、「エッセーの性格からして、モンテーニュの場合も、彼がもっとも重要と考えた思想だけを取りあげても、それを要約し、首尾一貫したものにするのは、実際には不可能である」<sup>79)</sup>し、また「モンテーニュのカトリック教については、数多の論文があらわれ、全く相反するような見解が出てきたために、もはやこの問題について明確な考えをうちたてることは事実上不可能である」<sup>80)</sup> というような、根本的な批判があることを、しっかり念頭においておく必要がある。第2には、モンテーニュの思想を総体的に論じうるとして、三期進化説そのものとはとらないとしても、少なくとも、その思想の歴史を考慮し、その要素を総体に組込むことは必要である。たしかに、ストア主義なのか、ストア的なのかという問題は、すでに見てきたように微妙ではあるが、それでもエッセーの歴史を知るわれわれにとって、それがモンテーニュの思想の一つの要素として、「何か *quelque chose*」であることは確かなことだと思われるから。第3に、モンテーニュの思想の「源泉 *sources*」にこだわって、解釈の便宜のためなら別として、やたらに「一主義-isme」のレッテルをはることはさけた方がよいと思われる。概念を規定し、分類し、体系に組みこむことこそ、もっとも反モンテーニュ的な事なのだから。すなわち、彼こそは、平凡なありのままの人間とその人生の持続的真実を、適確にとらえるために、抽象化とは全く逆の事物の具象化の方向に、「心像 *images*」や「比喩 *métaphores*」をふんだんに駆使して、意図的にもむいた最初の人間なのだから。第4は、エチアンプル、ビュトルなど多くの研究が<sup>81)</sup>、エッセーの「構成 *composition*」を問題にしているが、そしてまたエッセー各巻各章それぞれの構成は内容の解釈と関連して、たしかに重要な事ではあるが、やはりわれわれとしては、この問題の全般的総体的検討をすすめると同時に、この問題は現在の所、形式上の二義的な意味の方が強く、たとえモ

ンテーニュの意図がそうであったとして、その思想の総体が生み出す全体的効果の意味の方が重いことを、考えねばならないと思われる。最後に、モンテーニュ自身の、ある一つの主題についての論証の方法と、われわれがそれを論拠として取上げる場合に生ずる、さまざまな困難の問題がある。しかしこの問題は複雑な多くの要素をはらんでいるし、直接エッセーそのものについて論じなければならぬから、後日にゆずることとして、とにかくすでに述べた事ではあるが、そしてサント・ブヴの例を引く迄もなく、エッセーから論拠をとりあげる時には、慎重の上にも慎重に用心ぶかく、エッセー全体を見渡して検討してからでないと、あらぬことを論証することになりかねないことを忘れないようにしよう。

モンテーニュ像をとらえる視点については、これ迄検討してきたわれわれにとって、結論は一つしかない。それは、エッセーが、ミシェル・ドゥ・モンテーニュの個性を通じての「人間性の本質 *l'humaine condition*」の探求であり、その目的は「よく生きる *bien vivre*」ための「知恵 *sagesse*」を求めることである以上、われわれの視点も、思想家であるとか文学者であるとかの分類の問題ではなく、モンテーニュ自身のそれと同じものであらねばならぬだろう。

#### 註

- 1) この小論は本来『モンテーニュのエッセーにおける方法と構成について(Ⅲ)』として、以下のような構成の論稿の一部分をなすべきものである。「序；第1章モンテーニュ研究の歴史。Ⅰエッセーの版本について。Ⅱヴィレーおよびボルドー市版以前（同時代人）」以上は上記表題の(Ⅰ)として「神戸女学院大学論集、第15巻第2号」に、「Ⅱヴィレーおよびボルドー市版以前（マルブランシュ；パスカル；サント・ブヴ）」は、同じく(Ⅱ)として、「神戸女学院大学論集、第15巻第3号」に所載。本稿(Ⅲ)は「Ⅲヴィレーおよびボルドー市版以後。Ⅳモンテーニュ研究の問題と視点」となり、続稿は、機会に恵まれれば「第2章モンテーニュのエッセーにおける方法と構成の問題。Ⅰ論証の方法 Ⅱエッセーの構成。結論」となる予定。
- 2) *Les Essais de Michel de Montaigne publiés d'après l'exemplaire de Bordeaux, avec les variantes manuscrites & les leçons des plus anciennes impressions, des notes, des notices et un lexique. Par Fortunat Strowski (& François Gebelin, in t.3), sous les auspices de la Commission des Archives municipales. Bordeaux, Pech, t. 1, 1906 ; t. 2, 1909 ; t. 3, 1919 ; t. 4, Les*

- sources des Essais*, annotations et éclaircissement, par Pierre Villey, 1920 ; t.5, *Lexique de la langue des Essais et Index des noms propres*, par Pierre Villey avec la collaboration Miss Grace Norton, 1933.
- 3) *Ibid.*, t.1, pp.IX-XXII ; pp.459-464.
  - 4) Villey : *Les sources et l'évolution des Essais de Montaigne*, Hachette, 1908, t.1, pp.VII-X.
  - 5) *Œuvres complètes* de Michel de Montaigne, éditées par Armaingaud, Conard, 1924-1945, t.1, pp.I-VII.
  - 6) *Essais*, édition municipale, t.1, p.XXIV«Page du Titre de l'Exemplaire de Bordeaux(phototype)».
  - 7) Voir les notes 3 & 4.
  - 8) *Essais*, édités par Maurice Rat, Classiques Garnier, 1958, t. 1, pp. XXXIV-XXXV.
  - 9) *Œuvres complètes* de Pascal, éd. par J. Chevalier, Gallimard, 1954, pp.569-571, surtout p.570 : «Il rejette donc bien loin cette vertu stoïque...»
  - 10) 広島敏史：『モンテーニュのエッセーにおける方法と構成について（Ⅱ）』1969, 神戸女学院大学論集, 第15巻第3号参照.
  - 11) *Ibid.*, pp.20-35.
  - 12) *Op.cit.*, t.1-6.
  - 13) *Op.cit.*, t.1.
  - 14) Alexandre Cioranescio : *Bibliographie de la littérature française du seizième siècle*, Klincksieck, 1959.
  - 15) *A Critical Bibliography of French Literature*, vol. II. «The sixteenth century», edited by Alexander H. Schutz, Syracuse University Press, 1956, 1966, pp.vii-viii.
  - 16) *Bibliographie Internationale de l'Humanisme et de la Renaissance*, publiée par la Fédération internationale des Sociétés et Instituts pour l'étude de la Renaissance, Droz. I : Travaux parus en 1965, 1966 ; II : Travaux parus en 1966, 1968 ; III : Travaux parus en 1967, 1968.
  - 17) *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, travaux et documents, Droz.
  - 18) 広島 : *op. cit.*, (I) pp.97~98.
  - 19) Albert Thibaudet : *Montaigne*. Texte établi par Floyd Gray d'après les notes manuscrites, Gallimard, 1963, p.9.
  - 20) *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, t.XXXII-3, p.710, note 1.
  - 21) Fortunat Strowski : *Montaigne*, deuxième édition revue et corrigée, Alcan, 1931.
  - 22) Villey : *op. cit.*, Avant-propos, p.x ; Strowski : *op. cit.*, 1906, Préface,

## VII, VIII.

- 23) Strowski : *op. cit.*, p.1.
- 24) Villey : *op. cit.*, Avant-propos, p.X.
- 25) *Ibid.*, pp.55-70, 116-125 et 218-228.
- 26) *Ibid.*, pp.156-235.
- 27) *Ibid.*, pp.323-335.
- 28) *Ibid.*, pp.375-436.
- 29) *Ibid.*, pp.491-535.
- 30) *Ibid.*, pp.436-490.
- 31) Strowski : *op. cit.*, pp.83-118, surtout p.116 et pp.117-118.
- 32) *Ibid.*, p.218.
- 33) *Ibid.*, p.212.
- 34) *Ibid.*, pp.214-216.
- 35) *Ibid.*, p.214.
- 36) *Ibid.*, pp.180-181.
- 37) *Ibid.*, p.215.
- 38) *Ibid.*, pp.119-216.
- 39) *Ibid.*, pp.217-308.
- 40) *Ibid.*, pp.308-312.
- 41) *Ibid.*, p.328.
- 42) *Ibid.*, pp.313-346.
- 43) Villey : *op. cit.*, pp.545-547, (et pp.228-235) ; Strowski : *op. cit.*, pp.345-346.
- 44) Jean Plattard : *Montaigne et son temps*, Boivin, 1933, pp.198-206.
- 45) *Ibid.*, pp.262-263.
- 46) *Ibid.*, pp.261-268.
- 47) J. Plattard : *Etat présent des études sur Montaigne*, Les Belles Lettres, 1935.
- 48) Sainte-Beuve : *Port-Royal*, texte présenté et annoté par M. Leroy, Gallimard, t. I, livre III, pp.835.
- 49) Hugo Friedrich : *Montaigne*, traduit de l'allemand par Robert Rovini, Gallimard, 1968, p.7.
- 50) Ernest Seillière : *Le naturisme de Montaigne*, Nouvelle Revue Critique, 1938 ; セィエール, 関根秀雄訳『モンテーニュの自然哲学』, 創元社
- 51) H. Friedrich : *op. cit.*, p.7.
- 52) *Ibid.*, pp.7-8.
- 53) *Ibid.*, pp.13 et 15.

- 54) *Ibid.*, pp.15, 28-29, 35-38, 117.
- 55) *Ibid.*, pp.146-155.
- 55) *Ibid.*, III. L'homme humilié, pp.105-155.
- 56) *Ibid.*, pp.156-166.
- 57) *Ibid.*, pp.166-168.
- 58) *Ibid.*, pp.183-189.
- 59) *Ibid.*, pp.15-16.
- 60) *Ibid.*, p.13.
- 61) *Ibid.*, pp.14 et 195.
- 62) *Ibid.*, pp.15-16, 31-33.
- 63) *Ibid.*, pp.176-182.
- 64) *Ibid.*, p.14.
- 65) *Ibid.*, p.17.
- 66) *Ibid.*, pp.166-196.
- 67) *Ibid.*, pp.324-326.
- 68) *Ibid.*, pp.326-336.
- 69) *Ibid.*, pp.316-317.
- 70) *Ibid.*, pp.336-338, 78-79.
- 71) *Ibid.*, pp.316-339.
- 72) *Ibid.*, p.78.
- 73) André Lalande : *Vocabulaire technique et critique de la philosophie*, P. U. F., 1968., «Mobilisme».
- 74) A. Thibaudet : *op. cit.*, pp.252-253.
- 75) *Ibid.*, p.570.
- 76) *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, t. XXXII-3, pp.707-710.
- 77) Michaël Baraz : *L'être et la connaissance selon Montaigne*, Corti, 1968.
- 78) *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, t. XXXII-3, p.710, note 1 ; *Littérature française*, Larousse, 1967, t. I, in *Montaigne* par R. Lebègue, pp.140-144 ; Sem Dresden : *L'Humanisme et la Renaissance*, texte français de Yves Huon, Hachette, 1967, p.206 ; ドレスデン, 高田勇訳『ルネサンス精神史』, 平凡社, 1970, pp.219-220.
- 79) S. Dresden : *op. cit.*, p.204 ; 高田訳 pp.218-219.
- 80) *Ibid.*, p.208 ; 高田訳 p.222.
- 81) Etiembre : *Sens et structure dans un essai de Montaigne*, in *Cahier de l'association internationale des études françaises*, n°. 14, 1962, pp.263-274 ; *Littérature fr.*, Larousse, 1967, p.140 ; Michel Butor : *Essais sur les Essais*, Gallimard, 1968 ; 中村栄子『Essais : De l'amitiéの一節をめぐって—les Essaisの構成に関する一考察—』フランス語フランス文学研究 No.17, pp.8-14.

(F. 28. 青山学院大学文学部助教授)